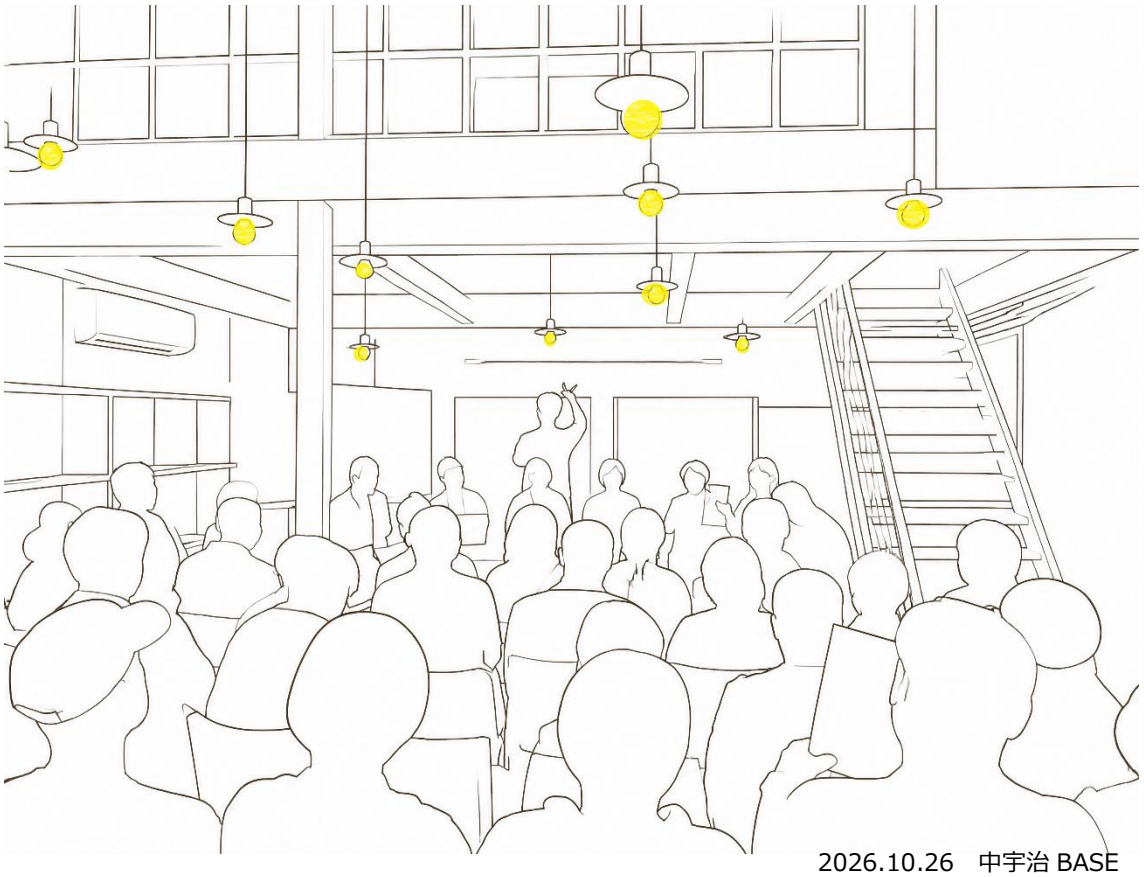
中宇治まちづくりトークセッション

公民連携でつくる中宇治地域の未来

イベントレポート



2026.10.26　中宇治 BASE

宇治市市民協働推進課

目次

１．開催趣旨 …… 1

２．実施概要 …… 2

３．中宇治エリアのこれまでのまちづくり …… 5

４．話題提供 …… 7

５．トークセッション …… 11

６．その他の疑問 …… 16

【番外編】交流会「酒屋に、お酒が戻る夜。」 …… 18

１．開催趣旨

人口減少社会の進行や情報社会の進展、価値観の多様化などを背景として、人と人との繋がりが希薄化する中、地域課題は多様化・複雑化し、既存の地域コミュニティだけでは対応が難しくなってきています。

今後、多様な地域課題に対応していくためには、地域コミュニティを再生し、住民同士をはじめ、様々な主体が連携・協働する市民協働のまちづくりに取り組んでいくことが不可欠であり、そのためには市民が交流連携できる場の確保が重要です。

人口減少という大きな変化を迎える中、私たちには限りある財源と人材を最大限に活かし、次世代へ確かな未来を引き継いでいく役割が託されています。

中宇治地域市民協働推進拠点は、世代や目的に捉われない気軽に立ち寄れる場、立ち寄りたくなる場であって、自然と人が集い、交流が生まれるような施設を目指し、地域コミュニティを支える重要なインフラとして整備を進めています。

本拠点の整備にあたっては、単なる施設建設に留まらず、建設後の維持管理や日々の運営をどのように持続させていくのかという視点を、計画段階から最も重要な要素として組み込む必要があります。

「公民連携」手法は、行政と民間がそれぞれの強みを持ち寄り、共に公共を支え合う「協働」の形です。民間の創意工夫等により、様々な世代のニーズを把握して迅速に対応し、まちなかの交流・協働をより良いものにする取組やコストも含めた効率的な管理運営も期待できます。

本拠点の整備では、長期的かつ安定的な施設運営を実現し、拠点の整備という公共事業を守りつつ、公共事業と民間事業の相乗効果やエリアへの波及効果を発揮するため、「民間主導の公民連携手法」をとることとしました。

中宇治地域市民協働推進拠点の整備は、施設をつくることがゴールではなく、人が集まり、活動が生まれ、まちの未来を育てるための起点です。この場を、公民連携により市民と共にまちを育てていくためのスタート地点とすることを目的に、中宇治まちづくりトークセッションを開催しました。

２．実施概要

日時

令和８年 10 月 26 日（月）　【第１部】17：00～18：45　【第２部】19：00～21：00

会場

中宇治 BASE（宇治市宇治妙楽 21-1）

プログラム

【第１部】トークセッション（宇治市主催）

1　中宇治エリアのこれまでのまちづくり

アーバンデザインセンター宇治（UDCU）宮城俊作さん

2　話題提供「行政だからできること」

話し手：紫波町職員　須川翔太さん（現・株式会社オガール研修派遣中）

株式会社オガール　代表取締役　岡崎正信さん

3　トークセッション「民間に、まちづくりを任せていいのか」

みなさまの疑問に登壇者が答えます。

登壇者：・紫波町職員　須川翔太さん

・株式会社オガール　代表取締役　岡崎正信さん

・UDCU　宮城宏索さん

・asobi-te　小暮えりなさん　出張裕美子さん

中宇治地域を中心に、「あそび」を通じて子どもたちの成長を支え、親子が共に楽しむ場を提供されている団体。
共に、この地域で子育て中。

・宇治市市民協働推進課　今儀妙子

モデレーター：UDCU　宮城俊作さん

【第２部】交流会「酒屋に、お酒が戻る夜。」（株式会社オガール/UDCU 主催）

1　紫波の酒をご紹介「酒のまちづくり」

2　宇治の食をご紹介

3　交流会

参加人数

【第１部】45 名　　【第２部】25 名

広報（チラシ）


民間に、まちづくりを任せていいのか。
中宇治のこれからを、
紫波町の20年から考える一夜。
中宇治地域に、新しい交流拠点をつくろうとしています。
つくるのは民間、使うのは市民、責任をもつのは市。
ーそう聞いて、素直にうなずける人ばかりではないと思います。
民間に、まちづくりを任せていいのか。
中宇治の環境が、変わってしまうのではないか。
儲からなくなったら、逃げられるのではないか。
第1部では、その問いを、この場で出してください。
岩手県紫波町は、20年近く、民間と一緒にまちづくりに取り組まれています。
紫波町の職員に「行政だからできること」をお話いただいた上で、
みなさまの問いにそれぞれの目線から答えます。
第2部は、紫波の酒と宇治の食で。
会場の中宇治BASEは、もともと酒屋だった建物です。
酒屋に、お酒が戻る夜になります。
■お申込み方法 QRコードからお申込みください。
https://forms.gle/umJoYbhfBC6g2Fji6
第1部のみ参加 or 第1部及び第2部参加を選択
あなたの疑問を聞かせてください。
• 当日も疑問カードを用意します。
（無記名で記入することができます。）
10/16(金)まで
第1部主催
宇治市
第2部主催
株式会社オガール
UDCU
協力
中宇治まちづくり株式会社
和旬 Kien
中宇治まちづくり トークセッション
ー公民連携でつくる中宇治地域の未来ー
2026
10/26 月曜日
第1部 17：00～18：45
（受付16：45～）
第2部 19：00～21：00
会場 中宇治BASE
宇治市宇治妙楽21-1
旧今村酒店
【第1部】トークセッション（宇治市主催）
無料
1 話題提供「行政だからできること」
話し手：紫波町職員 須川翔太さん（現・株式会社オガール研修派遣中）
株式会社オガール 代表取締役 岡崎 正信さん
2 トークセッション「民間に、まちづくりを任せていいのか。」
疑問歓迎！ みなさまからの疑問に登壇者が答えます。
〈トークセッションの3つのルール〉
どんな疑問でもOK!! ／人への批判はNG／うやむやにしない
【第2部】交流会「酒屋に、お酒が戻る夜。」
（株式会社オガール／UDCU主催）※会費制交流会です。
1 紫波の酒をご紹介
「酒のまちづくり」
2 宇治の食をご紹介
3 交流会
会費 3,000円
定員 30名 ※多数の場合、抽選
宇治市 市民協働推進課
shiminkyodo@city.uji.kyoto.jp
0774-20-8721（直通）



「オガール（岩手県紫波町）」は、全国から注目を集める公民連携（PPP）事業です。 かつて使い道がなく塩漬けになっていた駅前の町有地（10.7ヘクタール）を、行政と民間がタッグを組んで開発しました。多額の補助金に頼り切るのではなく、民間事業としてしっかりと収益を出しながら、図書館、農産物マルシェ、ホテルなどを整備。年間100万人以上が訪れる、まちの中心的なにぎわい拠点として育っています。 「施設をつくって終わり」ではなく、民間が稼いだ利益で公共施設を維持管理するという、持続可能なまちづくりを約15年にわたって実践し続けています。







株式会社オガール
代表取締役

岡崎 正信さん

1972年生まれ、紫波町在住。
1995年に地域振興整備公団（現在のUR都市機構）に入団し、各地で地域再生事業に従事する。2003年紫波町にUターンし岡崎建設(株)に入社。その後、オガールプロジェクトを企画推進すると共に、(株)マザー・オガール地域創生アカデミーを設立し、学校跡地でノウルプロジェクトを事業化している。



紫波町職員
現・株式会社オガール研修派遣中

須川 翔太さん

1984年生まれ、紫波町在住。
2007年入庁。町を盛り上げるべく、大学生のインターンや地域おこし協力隊を活用し、若者のチャレンジを後押ししている。空き校舎となった母校を活用し酒産業の振興をはかる「はじまりの学校」と、ラ・フランス温泉のリニューアルを推進している。

3．中宇治エリアのこれまでのまちづくり

UDCU の宮城俊作さんからは、エリアリノベーションとエリアプラットホームという視点で、中宇治エリアのこれまでのまちづくりについて、お話をいただきました。今回、このトークセッションを行っている中宇治 BASE は、UDCU の活動の拠点です。リノベーションとは、建物に部分的に手を加えて価値を与えていくことですが、これを中宇治エリアに当てはめ、中宇治エリア全体をリノベーションしていこうという意味で、エリアリノベーションという言葉を使われています。さらにそれを実行していくためのプラットホームとして UDCU、その拠点として中宇治 BASE をつくったとご紹介いただきました。











はじまりは、2014 年です。平等院の平成大修理を終え、観光客が増加する一方、オーバーツーリズムへの対応や空き家の増加が懸念されます。行政も課題感を持つ中で、「さきにやっちゃえ」と、先導的モデルとして 2017 年に、中宇治 yorin を開業されました。事業を長続きさせるためには、収益事業化させることが重要です。業種やプレーヤーの選定、起業支援や資金計画のサポートを行われています。

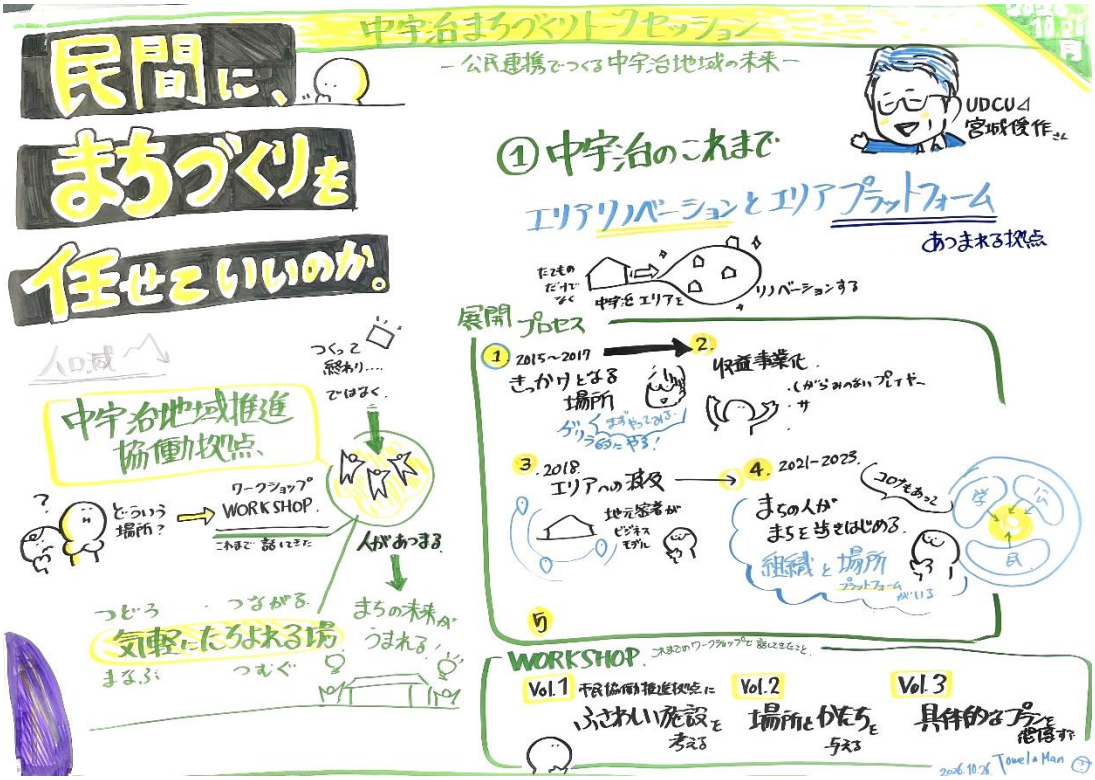
同時に中宇治で、空き家をリノベーションした店舗が増えてきました。コンパクトなエリアであることや、様々な空き家の存在、地元密着型の業態と、ツーリズムとの相乗効果を利点に、起業指向の強い若い世代のプレーヤーがこの動きを促進しています。

そんな中、2020 年に新型コロナウイルス感染症が流行し、世の中の動きが止まりました。中宇治エリアにも観光客はいなくなりましたが、その分、地元の人がまちを歩き、ローカルな暮らしを楽しむようになりました。宮城さん自身もこの期間、もともと東京と宇治を行き来されていた生活から、宇治に腰を下ろし生活をされたそうです。



このタイミングで、これまでの動きを促進すべく、公・民・学のプラットホームであるアーバンデザインセンター宇治を組織し、その拠点である中宇治 BASE を開業されました。中宇治 BASE は、季節の良いときには、月の半分ほど利用されており、暮らしに根ざした場所となっています。近年のエリアリノベーションの取組としては、中宇治地域市民協働推進拠点の整備に向けたワークショップ実施の支援を行っていただきました。

【グラフィックレコード（記録：肥後祐亮さん)】



４．話題提供

岩手県紫波町職員の須川翔太さんからの話題提供は、「まちづくりは誰のもの？」という問いかけからスタートしました。須川さんは、紫波町役場商工観光課でラ・フランス温泉リニューアル特命担当を担われており、今年の７月から株式会社オガールに派遣、まちづくりを学ばれています。ライフワークは「酒とサウナでまちづくり」で、利酒師や熱波師など資格を取り、ポットキャストで「ききざけラジオ」の配信や、ラ・フランス温泉のサウナで実際に熱波師として活動されているそうです。



人口減少・少子高齢化の進行、空き家・空き店舗の増加、地域コミュニティの希薄化など、まちには心配事が溢れています。さらに新しい施設の話になると、「公民連携」で市民が使いやすい施設ができるの？民間企業が「まちづくり」を担うことができるの？逃げられてしまうのでは？と不安があるかもしれません。不安に感じるのは、「まち」に真剣に向き合っているからなのではないか、大切なのは不安を消すことではなく、みなさんの疑問を共有し一緒に考えていくこと、と須川さんはおっしゃっていました。紫波町でも、駅前開発であるオガールプロジェクトが注目される一方、農村部が取り残されたという意見もあったそうです。

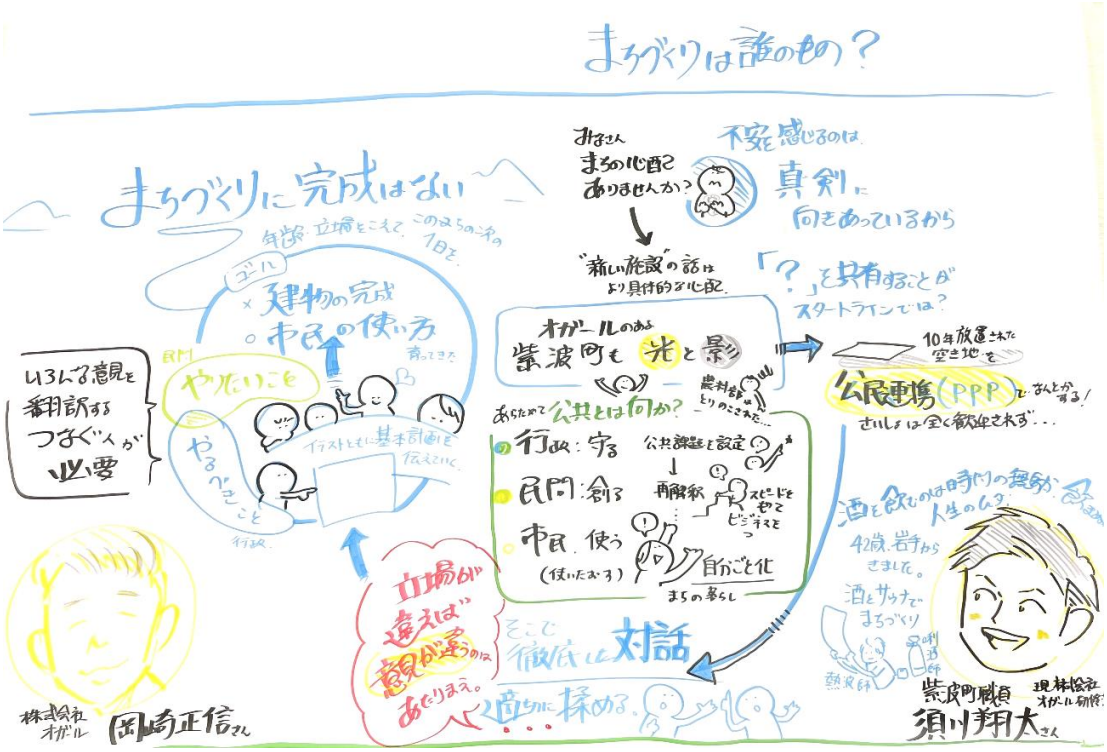


まちを良くしたいという思いは、みんな一緒です。改めて「公共とは何か？」を問い直す必要があるのではないでしょうか。行政は「守る」・民間は「創る」・市民は「使う」。現代の成熟社会の中、行政任せのまちづくりでは「豊かな暮らし」は難しく、行政・民間・市民がみんなで連携し、一緒に作っていくことが大切なのではないかと、訴えかけられました。

オガールプロジェクトは、10 年間放置された駅前の 10.7ha の荒れ地からスタート。公民連携（PPP）という新しい手法は全く歓迎されなかったそうです。そこで行われたのは、徹底した「対話」です。町民対話は 100 回、民間企業 40 社と対話され、適切に揉め、互いに理解し、認め合うことを少しずつ積み上げていくことの重要性を学ばれました。「紫波町公民連携基本計画」では、未来の紫波中央駅前における一日をイメージし、使うプロである「町民」とそこで「何をするのか」をたくさん話し合われました。それによって町民の「使い方」が育ち、施設を使い倒すことを通じて、豊かな暮らしを「自分たちの手で」創っていくことに繋がっているのではないかとおっしゃっていました。

「民間と付き合う」ことは、違いを理解することです。行政は、やらなければならないことをやる。だから、常に公平公正でなければなりません。民間は、やりたいことを自ら判断してすることができる一方、常にリスクが伴います。違うからこそ、連携したときに、「新しい価値」を創造することができると考えられています。須川さんは、今も、ラ・フランス温泉館の再建に取り組まれています。民間と付き合うなら、「同じ現場にダイブする」ことを大切にされており、再建に向けてサウナに力を入れる為、熱波師の資格を取って活動されているそうです。

公民連携には、違いを理解し「つなぐ人」が必要不可欠です。中宇治では、もう始まっています。次の問いは、完成後、どのように施設を使い倒し、自分たちの暮らしを育てていくかということ。まちづくりに「完成」はありません。年齢も立場も超えて、このまちの次の一日を一緒に考えていくことが大切ですと、訴えかけられました。



続いて、今年度、宇治市公民連携アドバイザーを担っていただいている、株式会社オガールの岡崎正信さんより、話題提供いただきました。岡崎さんは、もともと建設省都市局都市政策課などで地域再生業務に携わられた後、出身地である紫波町で、公民連携事業を企画推進されています。現在、沖縄県南城市と二拠点生活を送りながら、南城市でも公民連携事業の企画推進に取り組まれています。



公民連携は、目的ではなく手法だということを、岡崎さんは強調されました。大切なことは、その公共事業が「維持できるのか？」その一点です。本当に大切なのは、その公共事業が必要なのかを自問自答し、それを維持していくためにはどうするのが最善なのかを議論することであり、議論の結果、従来のやり方がいいと判断するならやればいいし、民間との連携が必要だと判断するなら民間との連携を進めていけばいいとおっしゃっていました。

宇治市のお金の本当のところとして、市民・企業が納めた税金だけでは、市が払うべき固定費が払えない現状を示されました。



紫波町の場合、岡崎さんが、お金のない紫波町とエージェント契約を締結し、代理人として、政府系金融機関と銀行からお金を借りて、まちのために投資するという形をとられました。エージェントが、行政に「地域の実情に沿った事業提案」ができないと、銀行から資金調達できません。市場に応じて軌道修正を図り「適切な仕様」を官民が共に探っていくプロセスを示されました。町のみなさんに理解いただくため、マスタープラン作成に非常に力を入れたとおっしゃっていました。紫波町になかった図書館をつくるため、併設したテナントから得られた利益を維持管理経費に充てるというやり方を提案されました。図書館の集客力を活かして、テナントに稼いでもらって、その稼いだお金を運営経費に回す「稼ぐインフラ」というやり方を編み出されました。

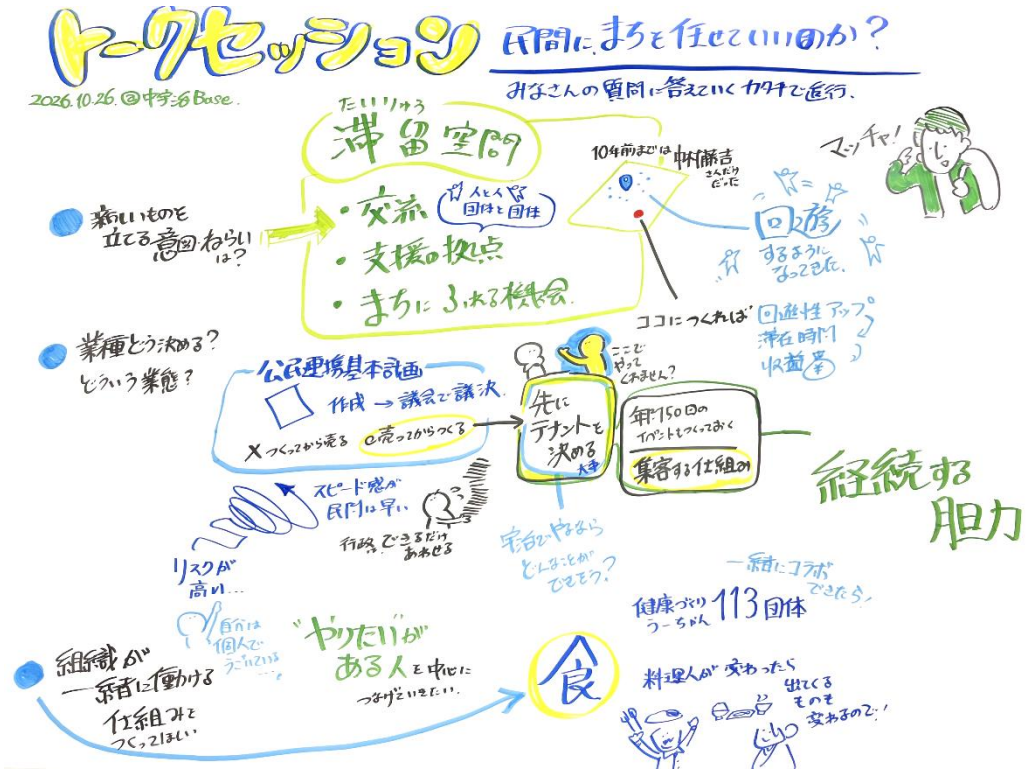
その後、紫波町からの「若者がチャレンジできるまち」というお題に対し、自身が関わられてきたバレーボールに着目し、日本初のバレーボール専用アリーナをつくられました。9 千万円の国補助金と 6 億 8 千万円の銀行からの融資によって、投資されました。どうしてお金を借りることができたのか。銀行の頭取にライバルのいない分野で尖ることで地球の裏側からでも見えるというピンホールマーケティングを提案されました。今では、日本代表合宿や各国代表の合宿などでも利用されています。続いて、保育園、小児科、病児保育などの子育て支援コンテンツをメインとしたオガールセンターをつくられました。元々子どもの少なかった紫波町に、近年待機児童が発生するようになったそうです。現在、紫波町は 14 年連続地価が上昇している奇跡のまちと呼ばれるようになりました。

岡崎さんは、「公権力に競争をもたせること」が大切だと語られます。公権力とはもともと「秩序を守るために必要な力」です。一方で、権力が大きくなると上から押し付けられる危険性もあります。公民連携によって、公権力の行使を政府セクターだけでなく、民間セクターも担えるようにした結果、誰でも公共サービスの担い手になれる可能性が生まれ、ここに「競争」が導入されることで、民も「公」を実践できるようになるのです。将来は不確実と言われていますが、人口減少・少子高齢化・インフラ老朽化は以前から分かっていたことです。リスクは避けられなくても、事前に予見して、対応策を考えることは可能です。そのためには、民の知恵や技術が必要になります。柔軟な発想は民間にこそあります。実行のための権限や覚悟、勇気は官の側にあります。ここをうまく組み合わせるのが、公民連携なのです。最終的には、「公権力を上手に使いこなす人」が必要です。公権力を上手に使いこなす人が存在する地域には可能性が宿る。と岡崎さんには、希望と可能性を示していただきました。



5．トークセッション

トークセッションは、みなさまの疑問に対して、登壇者が答えるという手法で行いました。いただいたご質問と回答内容をご紹介します。





登壇者：㈱オガール　岡崎さん　　紫波町　須川さん　　UDCU　宮城宏索さん
asobi-te　小暮さん、出張さん　　宇治市市民協働推進課　今儀
モデレーター：宮城俊作さん

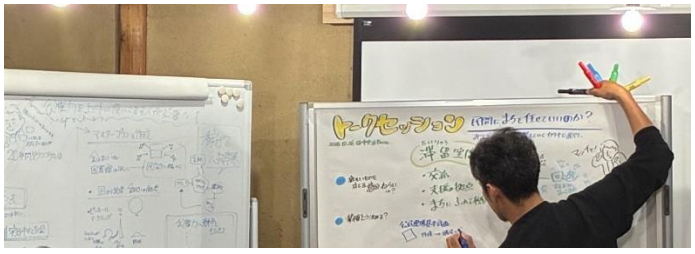
No	質問	回答者	回答
1	中宇治エリアは観光地であることから、観光客を含め、人通りが多い。 そのような場所で、新たな拠点をつくることの狙いはどのようなところか。	今儀	今回整備する施設は、「宇治市に暮らす人々の交流の場」「まちづくりのつなぎ役」「中間支援の拠点」に加えて、「宇治市に訪れた方が街や街での暮らしに触れる場」となることを狙っている。 まちづくりの観点でいうと、「ウォーカブルなまちづくり」を目指し、人が様々な場所に歩いて楽しむことで、エリアの回遊性を高める狙いがある。
		宮城（宏）	現状、近隣には多くの商店があるが、10年前は1店舗のみであった。10年前までの観光客は「宇治駅から宇治橋通り商店街を通って平等院の表参道へ向かう」という流れしかなく、回遊性が低かったが、現在は、様々な場所に商店ができたことからエリアの回遊性が高まっている。 また、観光客はGooglemapを頼りに観光される。Googlemapでは平等院までの最短ルートとして、路地を案内されることが多いため、自然と中宇治エリアを回遊するようになっている。 最近、エリア内に本格的なコーヒーショップができた。抹茶を買いに来られた観光客がコーヒーを飲まれ、「美味しかった」とSNSに投稿し、それを見た新たな観光客がお店を訪れる。そのような新しい形の人の流れができ始めている。 拠点の整備予定地のポテンシャルは高い。拠点が整備されると、宇治市の回遊性が高まり、滞在時間が長くなることから経済効果も大きいと考えている。
2	公民連携事業において、「収益性」は不可欠であり、採算性が問われる。 テナントに入る店舗のカテゴリー（業態・業種）はどのように決めるべきか。	岡崎	紫波町には海外の方（観光客）がほとんど来られないため、中宇治エリアとは背景が違うが、紫波町を例にお話しする。 紫波町では公共目線で「町が持つ土地にどんな機能を持たせていくか」を定めた「公民連携基本計画」を策定した。 施設をつくってから民間に売ろうとしても売れない。民間に売ってから施設をつくる。オガールプラザもオガールセンターもテナントとして入っていただく企業を決定した後に施設をつくった。 基本計画に定めているまちづくりの方向性を基にテナントを決定し、そのテナントが必要とする施設しかつくらない。年間のイベント等も施設整備の前に決定し、「集客機能・集客イベントもあるからテナントに入ってもらえないか」と営業をしている。 オガールにある「保育施設に併設された小児科」等、行政は初めての試みを行うことが難しい。そこを切り開いていくのが私（民間）の仕事。
3	紫波町の取組について、行政の立場からどう考えているか。 民間企業だからできる事・できない事についてどう考えておられるか。	須川	民間と行政の決定的な違いはスピード感。行政の感覚で進めてしまうと、従来通りの緩やかなスケジュール感でしか進まない。 できる限り行政側も改善し、”スピード感”と”考え方”を民間に合わせていく積み重ねが重要。
4	新たな拠点の理念として「”誰でも”気軽に立ち寄れる」とある。すごく分かるが、「誰でも」は良い言葉でもあり、ある意味、暴力的なところがあると思っている。いつ、誰が、どんな時に立ち寄れるのか。中宇治エリアで活動されている皆様は”誰でも”という表現についてどんなイメージを持たれているか。	出張	中宇治エリアで事業を実施している際、中宇治エリアの住民はもちろん、少し離れた地域から来られる方もおられる。 一住民としては、自分の子どもたちの世代が一番に思い浮かぶ。中宇治や近隣エリアに住んでいる子どもたちが約束をして集まることのできる場所であれば”誰でも”というイメージに合致する。
		小暮	自分たちが子育てをする中で、「こんな取組が地域であれば良いな」というものを事業として実施し、「地域住民の方々は誰でも来てもらいたい」という想いを持っている。 実際は中宇治エリアの方はもちろん、他地域の方も来られる。他地域から来られた方は事業後に中宇治エリアを回遊されている。 ”誰でも”としているが、予約方法等や施設のルールによっては、使える世代・使いやすい世代は限られる。使いたいと思ったときに手が出せないこともある。 ふれあいセンターはWEB予約のサービスも始まっているが、実情は先着順の窓口受付で予約が埋まる。平日の朝9時から窓口予約が始まるが、平日朝に施設窓口へ行くことは働き世代や子育て世代にとっては困難。

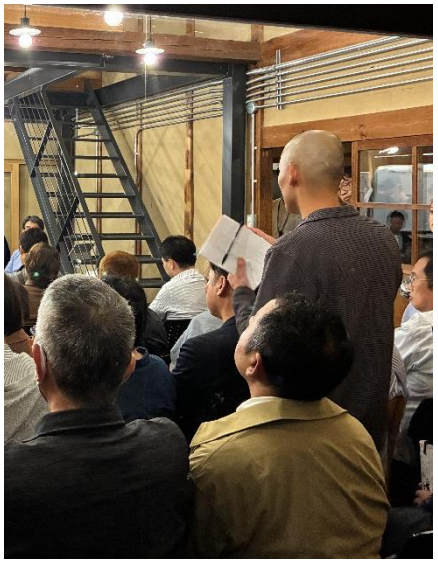
No	質問	回答者	回答
5	＜モデレーター宮城(俊)さんより参加者へ問いかけ＞ 参加者の方の中で、「誰でも」に対して持たれるイメージはあるか。	参加者	中宇治エリアを回遊されている方の半分は海外の観光客、1/4は日本の観光客という印象。ふれあいセンターで様々なイベントをされているが、中宇治エリアに来られている方によって内容は変わる。 ”誰でも”というと、そういった海外の観光客も含まれると考える。
		参加者	イベントは交流を生む。交流を生むためにイベントを実施するという考え方もあるのでは。 私の店でもインバウンドの方が来られる。店内で自然と日本の方と海外の方の交流が生まれ会話が弾んでいる様子が見られる。 そのようなことがこのまち全体でできないか。”誰でも”の中には地域住民の方はもちろん、海外の観光客も含むと考えている。施設の利用者同士での交流を生み、それによる相乗効果を生むような仕組みができないか。
		宮城（宏）	高校生はスターバックスなどで勉強をする。しかし、中宇治にあるスターバックスには観光客が多く、スターバックスで勉強することさえできない状況。 また、マクドナルドにおける平日の利用者や従業員は意外と高齢者の方が多い。 スターバックスの代わりではないが、人が立ち寄れる仕組みを作ることができれば、地域の小中高生も利用できるし、現在マクドナルドを利用されているような高齢者の方も立ち寄るかもしれない。そういった取組も1つの多世代交流にあたる。
6	宇治市を外から見たときの感想を教えていただきたい。	岡崎	確かに”誰でも”という表現は少し乱暴に感じる。 東京大学の根本教授が図書館について「用が無くても行けるところ」と言っておられたことに感銘を受け、「居場所をつくる」という感覚を大切にしている。 紫波町の施設利用者には海外の方は少ないが、多種多様な様々な人が来られ、思い思いの使い方をされている。 できる限り、宇治の景観等を財産化するランドスケープ（建物よりも街並みや風景を大切にして）の施設であれば、用が無くても、「あそこに行けば何かやっている」となるのでは。そういう空間は民間でつくることができない。そこが行政の役割であるとも考えている。行政が作る空間の味付けを民間が担う。
7	ふれあいセンターの立地についてどんな可能性を感じるか。	小暮	道は狭いが、駐車場があることがありがたい。 ふれあいセンターや宇治橋通り商店街で何かイベントを実施する際、近隣にはコインパーキングしかない。
		出張	子育て世代はイベント参加時に乳幼児を連れて来られる。ベビーカー等の荷物も多いため、参加者にとって駐車場があることは魅力的。
		宮城（俊）	中宇治エリアは基本的にウォーカブル（歩いて完結するまち）なまちにしたいというビジョンがある。 今回整備される施設には、オープンスペース（パブリックスペース）がポイントとなるため、駐車場にどの程度のスペースを確保できるかは難しいポイント。
		宮城（宏）	中宇治エリアにはコインパーキングが多い。 整備施設の方向性が決まれば、間違いなく、協力（提携）いただけるパーキングが出てくる。
8	現在、ふれあいセンターで行っている活動は新施設でも継続できるか。	宮城（俊）	これから如何様にでも扱える。 例で挙げられているもので言えば、「保護猫の譲渡会」。パブリックスペースで実施できる可能性は大いにある。

No	質問	回答者	回答
9	＜参加者より＞ 宇治市には「食育」をテーマに掲げた組織がある。新施設においても「食育」や「食文化の発信」をテーマとして、組織で取り組める環境を整えていただきたい。	今儀	「人と人」や「団体と団体」をつなぐことが重要であると考えているため、新施設には「中間支援」の機能を持たせる予定。 人や団体の「やりたい」という想いを実現することに重きを置くことで、更なる繋がりが生まれると考えている。「やりたい」という想いを持った人や団体を大切にしながら整備を進めていく。
		参加者	当初、中宇治は観光地というイメージを持っていたが、事業等で関わる中で暮らしておられる方が多いことも分かった。 観光客の方は、「平等院」「抹茶」のイメージを強く持っておられ、中宇治の魅力が伝わりきっていないように感じる。この地域の文化や歴史を含めた魅力を発信できるような拠点にしてもらいたい。 また、以前のワークショップでは、学生から「学び続けられる場所にしたい」という意見が挙がっていた。中宇治は歴史や文化もある一方で新たな取組等を取り入れ成長し続け、革新的であると感じている。新施設は、古い文化や歴史を大切にしながら学び続けられるような場所になればと思っている。
10	拠点において、小学生の子どもたちの学校外での遊びや学びの可能性はどんなところに感じることができるか。	小暮	共働きの世帯が多く、育成学級の利用者が多い。 育成学級を利用していない子どもは少なく、放課後は限られた友達と遊ぶことになる。しかし、菟道小学校は校区が広く、子ども同士の物理的な距離が遠い。 地域で遊び相手を探している子どもたちに対して、放課後、学校から直接、新施設に向かい、そこで友達と遊ぶようなことができないか。 「自然と地域の子どもたちが集い、それを見守る大人がいる」そんなシステムができたらと考えている。
		出張	中宇治エリアでは、地域の子どもたちが公園で遊んでいると、おばあちゃん世代のお年寄りの方が家から出てきて一緒に遊んでおられる様子をよく見かける。更には家の敷地内まで子どもたちに開放されている方もおられる。私の家でも、放課後の時間帯には敷地の一部を開放し、机とボードゲームを設置している。そこで様々な学年の子どもたちが集い、宿題やボードゲームをしている。新施設も、子どもたちが宿題をしたり、遊んだり、多世代で交流したりできるような場所になればと思う。
11	紫波町のオガールも小中学生の集いの場となっているのか。	須川	町内全ての学校というわけではないが、オガールが小中高生の集いの場にもなっている。平日・休日問わず（平日は特に夕方の時間帯）、建物の中でも外でも、使いたいように思い思いの過ごし方をされている様子が見受けられる。
12	新施設が小中学生の集いの場にもなることを想定し、どんな可能性があるか、思い描いておられることはあるか。	参加者	現在、ふれあいセンターで行われている週1回のBタイプリハビリに通っている。ふれあいセンターがどのように建て替わるか分からないが、このBタイプリハビリの取組が拡大することで、子どもたちにも通じる取組になると考えている。 現在、当該事業において、読書サークルによる紙芝居等の他団体との連携による取組もあるが、連携施設の広さや備品の数量等、ふれあいセンターのキャパシティを超えてしまう。将来的に、施設が建て替わり、大きなオープンスペースができれば、この取組に近隣の保育園等も巻き込み、世代を超えた取組ができるのではないか。 先ほど「建物を建てて終わりではなく、使い方を工夫する」とあったように、使い方を考え、地域で交流が生まれるような場所を民間と一緒につくっていきたい。 中宇治エリアにはいくつも町内会があるが、町内会に加入しない世帯もおられる。町内会に加入されないからといって、交流を求めていないわけではない。 現在、中宇治エリアから一番近い図書館が中央図書館であり、不便に感じている。新施設には持ち寄りでも構わないので、図書室を設置していただきたい。

No	質問	回答者	回答
13	新施設に誰でも使えるようなキッチンができると想定し、組織的に活用できそうなイメージはあるか。	参加者	料理人が変われば、提供する食は変わる。組織的に繋がりのあるメンバーで運営できれば、物事はスムーズに進むと考えている。
		参加者	宇治市健康づくり推進課が事務局を担う「宇治市健康づくり食育アライアンス うーちゃ」という団体があり、現在133団体が加入している。それだけ、健康づくりや食育に多くの方が携わっておられるということが宝物であると考えている。 是非ともこういった地域の団体とも、連携していただきたい。
14	「拠点をどこに整備するか」という議題があり、「ふれあいセンター敷地」と「宇治公民館の跡地」が候補地であった。 拠点の整備地が「ふれあいセンターの敷地」に決まった経過の説明いただきたい。	今儀	令和5年度のワークショップにおいて、候補地のメリット・デメリットの比較や、どういった活動ができるかを検討した。 宇治公民館跡地は、公民館があった時から比べてJR奈良線の踏切が無くなった関係もあり、アクセスが不便になっている。観光客も市民も子どもたちも集まりやすい場所ということを考えたとき、ふれあいセンターの敷地に整備することがふさわしいと考え、決定した。 また、中宇治エリアのウォーカブルなまちづくりに新施設を組み込むこともふれあいセンターの敷地を整備地にした要因の一つ。









６．その他の疑問

当日お答えできていなかった疑問・事後アンケートに記載いただいた疑問にお答えします。

疑問	回答
公民連携において、収益を出すテナント等によって収益性が変わるのでは？どのような方をターゲットに考えているのか。	現在、中宇治地域市民協働推進拠点整備事業に係る民間提案を募集中です。ご質問の通り、内容や運営を具体的にどのように考えていくのかという点は、非常に重要なファクターとなります。 それらについては、事業の具体化を図るプロセスの中で、パートナーとなる民間事業者と深く協議をしながら形を作っていくことが大切だと考えております。
どういう施設にするのかはすごく重要だと思うが、それと同じかそれ以上に完成してからどのように運営していくのか（作り上げていくのか）がすごく大切なので、そのあたりをどのように考えていくのか。	
想定した収益を得られなかった場合、公共施設部分の運営や維持管理は誰がどのように責任を負うのか？民間事業者が撤退したときのリスク管理はどのように考えるのかどのように考えるのか。	民間事業者が事業の計画段階から主体的に関与することで、市場性や採算性を十分に見極めながら収入に応じた事業計画を立てること、民間事業者が金融機関より融資を受けられる際には事業性を審査されることから、仕組みとして倒産や撤退のリスクを低減できるものと考えております。 公共施設部分の運営や維持管理については、市が責任を持って取り組んでいきます。
子どもたちが安心して利用できる安全対策や見守り体制はどのように考えていくのか。	子どもたちを含めた地域住民が安心して過ごせる場づくりは、重要なポイントだと考えています。ご心配の点については、ハード面、ソフト面から工夫が必要だと認識しており、今後、パートナーとなる民間事業者との協議の中で、重要なポイントとして、協議をしていきます。
観光客が来すぎてしまい、地元の人が行きにくくなってしまわないか心配です。	

疑問	回答
紫波町須川さんの話題提供の中で、駅前開発であるオガールプロジェクトに光があたる一方で、農村地域からは「オガールばっかり」という声も…というお話があったが、新たな取組を推進していく中で、既存組織・地縁組織とうまくやっていくための取組や工夫などがあったら教えてほしい。	【紫波町須川さんより回答】 ご紹介した事例に関しては、紫波町の主に農村部における事例になります。農村部を意識した取組みとしては、主に 2 種類あります。 （１）廃校となった旧小学校の活用事業 紫波町では 4～5 年前に小学校の大規模な統廃合が行われ、農村部に多くの廃校が発生しました。地域の財産である廃校を取り壊してしまうのではなく、町のため、地域のために活かすため、民間事業者さんと連携してほぼ全ての廃校で新しい事業を展開しています。この過程において、既存組織や地縁組織の方々と様々な協議を行い、農村部の課題解決に寄与する事業構築に努めています。 （２）国の制度を活用した新たな人材の導入 国の「地域おこし協力隊」や「集落支援員」という制度を活用し、特に農村部に対して新しい人材・若い人材を導入しています。農村部には若い力が不足していますので、外部から若い人材が入り込むだけでも活力の向上に繋がります。また、第三者的な新しい視点が加わると、既存組織や地縁組織の活動が活発化することが期待されます。
公民連携を推進していくのであれば、市民との話し合いの場をもっともっと持つべき。ワークショップがより一層必要では。	市民のみなさまとの対話の場を持つことの重要性を再認識した場となりました。今後も継続的にみなさまとの対話の場をつくっていきます。

【番外編】交流会「酒屋に、お酒が戻る夜。」

トークセッション後に、株式会社オガールと UDCU 主催で交流会を実施していただきました。紫波町の美味しいお酒と和旬 Kien 岡本さんの腕によりをかけたお料理を囲み、和やかな雰囲気の中、それぞれが取り組んでいること、本事業や中宇治のまちづくりについて、意見交換が生まれていました。

立場を超えて、このまちのまちづくりを考えていく。そんな空気感がこの場所に溢れているように感じました。








中宇治まちづくりトークセッション　イベントレポート
令和８年 11 月作成

作成・発行：宇治市市民協働推進課
ＴＥＬ　0774-20-8721
MAIL　shiminkyodo@city.uji.kyoto.jp